

第1回 三次市立学びの多様化学校等の設置に係る検討会議 議事録

件名	第1回 三次市立学びの多様化学校等の設置に係る検討会議		
日時	令和8年2月4日(水) 14:00~16:00	場所	三次市役所本館3階会議室
出席者	11名	出席者(事務局)	
	<ul style="list-style-type: none"> ・七木田座長 ・水戸委員 ・池田委員 ・石田委員 ・宍戸委員 ・部谷委員 	<ul style="list-style-type: none"> ・山崎委員 ・赤木委員 ・沖山委員 ・渡邊委員 ・田中副座長 	<ul style="list-style-type: none"> ・迫田教育長 ・宮脇教育部長 ・豊田教育部次長 ・渡部教育企画課長 ・新谷学校教育課長 ・高野教育企画係長
欠席者	2名		
	<ul style="list-style-type: none"> ・今村委員 ・小根森委員 		<ul style="list-style-type: none"> ・平主事 ・曲田専門員 ・山崎不登校支援政策コーディネーター
議事	<p>(1) 三次市が創る「学びの多様化学校」について</p> <p>①めざす学校像、めざす生徒像について</p> <p>②学校の特色について</p> <p>(2) 今後のスケジュールについて</p>		

事務局

本日は大変お忙しいところ、ご出席いただき感謝申し上げます。

開会に先立ち、一言お願いさせていただく。

本会議は公開とさせていただき、ご意見を記録するため、音声の録音をさせていただきます。また本会議のご意見はホームページ等で公開する。

それでは、ただいまから第1回三次市立学びの多様化学校等の設置に係る検討会議を開会する。

私は司会をさせていただき、教育委員会教育部部長の宮脇である。本会議は2時間程度を目安に進める。

本日は傍聴の希望があるため、入室を許可する。

～傍聴者入室～

続いて、本会の開会にあたり教育長の迫田からご挨拶申し上げます。

教育長

本市の教育行政のみならず、本市の行政施策に関わって皆様方には日頃よりご支援ご理解をいただいておりますことを、この場を借りて厚く御礼申し上げます。現在、社会状況が非常に急激に変化し続けている。そうした中で、私どもの中山間地域は、日本が抱えている社会課題のいわゆる最先端と言っても過言ではない。こうした中で、ひとつづくりをまちづくりの基盤とした取組

を進めてきた。しかし、その取組についても改めて社会状況を見据えた見直しが必要である。

本市においては、令和5年度にこれからの10年間を見通した総合計画を策定し、令和6年度からスタートしている。この年度に合わせて、「みよし学びの共創プラン」を令和6年度から進めている。そのような中で、「みよし結芽人」を育てるためには、様々な人と協働し、社会課題に向けて自分から活動する、そうしたひとつづくりをしていく必要がある。

本市の子どもが学校教育の中で「行きたい、楽しい、もっと学びたい」、そう思える学校があるということ、そして市全体で安心して過ごすことができ、夢を持って学び、可能性を広げて伸ばしていくことができる魅力ある教育環境を実現することが必要である。

「みよし学びの共創プラン」の具現化のために、「三次市立小中学校のあり方に関する基本方針」を策定し、今年度から取組を進めている。この基本方針においてはさらなる学校の魅力化として、中学校生徒を対象にした学びの多様化学校、いわゆる不登校特例校と、小学校児童を対象とした小規模特認校の設置の検討を進めている。

本市の子どもの現状を踏まえながら、本市の魅力を最大限に生かした学校教育環境として、誰1人取り残さない教育の実現につなげていきたい。

委員の皆様方は各分野で多くの知見や経験を有しておられる。学校に行きづらい、あるいは学びの環境に困り感を感じている子どもたちに社会で自立する力をつけることができ、安心して過ごせる場をどのようにつくっていけばよいか、ともに共創するという立場から、多様な観点で皆様方にご意見をいただき、よりよい環境づくりにつなげていきたい。

限られた時間でご無理をお願いすることもあると思うが、本日からよろしくごお願い申し上げます。

大変簡単ではあるがご挨拶とさせていただきます。

事務局

続いて、次第「3 検討会議委員」の紹介に移る。

この度、委員にご就任いただいた皆様には、就任にあたりご快諾をいただき厚くお礼申し上げます。委嘱状並びに任命書については、お一人ずつお渡しさせていただくのが本意ではあるが、時間の都合により、既に席に配付させていただいていることをご了承いただきたい。

本会議の委員については、設置要綱第3条に定める各分野の方15名以内で構成することとしている。今回検討委員としてご就任いただく委員の皆様を紹介させていただきます。

～各委員の紹介～

事務局

なお、本会議の所掌事務は、設置要綱第2条「学びの多様化学校等の設置に関する提言を行うこと」と定めている。各委員の皆様にはそれぞれの活動分

野からご意見をいただきたい。任期については、設置要綱第4条により、委嘱または任命した日、令和8年1月20日から令和9年3月31日までとさせていただきます。

今後の会議スケジュールについては、今年度に2回、来年度に2回程度を予定している。

続いて、本日出席している教育委員会事務局の職員を紹介する。

～事務局の紹介～

事務局 続いて、次第「4 座長、副座長選任」に入る。
座長及び副座長については、設置要綱第4条の規定により、委員の互選となっているが、選出方法についてご意見ご提案があればお願いします。
なければ、本日が初めての会議ということもあるので、事務局から案をご提案させていただきます。

委員一同 ～異議なし～

事務局 それでは、座長には、広島文化学園大学大学院教育研究科長 教授 七木田委員を、副座長には、三次市教育支援ルーム 室長 田中委員をご提案させていただきます。ご承諾いただける方は拍手をお願いします。

委員一同 ～承認（拍手）～

事務局 それでは、お二方を選任させていただきます。七木田座長、田中副座長から一言をお願いします。

七木田座長 ただいま皆様からお認めいただいた、座長をつとめる七木田である。約20年前から就学指導委員会等で特別な支援を要する子どもたちの教育や保育等を実践の場で見させていただいている。そのような視点からも意見できればよい。どうぞよろしくお願い申し上げます。

田中副座長 教育支援ルームの田中である。支援ルームに勤務をし始めて間もなく3年になる。たくさん子どもたちや保護者と出会ってきたことをもとに、皆様と一緒に慎重に審議していきたいと思う。どうぞよろしくお願い申し上げます。

事務局 続いて、次第「5 経過報告」に入る。学びの多様化学校の説明や設置に至る背景、不登校の状況について説明する。

～資料3・資料4に沿って説明～

- 七木田座長 「三次市立小中学校のあり方に関する方針」には、児童のアンケート結果と保護者の意見は書かれているが、中学生の結果がない。学びの多様化学校の話で言えば、当事者の意見を聞きたいが掲載されていない理由があるのか。
- 事務局 中学生については、令和5年度に「みよし学びの共創プラン」を策定する際、基盤となるデータのアンケート調査を行っている。ここには添付していないため、後ほど皆様に共有する。
- 宍戸委員 資料4の9ページ下部「三次市がめざす不登校の支援対策」の図は現状を把握するためにあると思われる。この相関図がうまく機能しているのか、していないのか、あるいは機能していない部分はどのようなことか伺いたい。
- 事務局 不登校児童生徒が増えている状況において、まずは原因の把握という点で、学校と教育委員会の相談窓口としての機能が弱いことがあり、各機関との連携をより密にしていく必要がある。また、居場所づくりという点で、長期欠席の子どもも含めた状況把握や、その子たちをつないでいく機関の力の弱さが課題である。全力で取り組んでいるが、今後、学びの多様化学校をハブとした連携をしっかりと行い、関係機関へ情報提供をしていく。もちろんフリースクールやスクールSともしっかりと連携していく必要があると考えている。
- 山崎委員 資料4の7ページの「三次市における長期欠席・不登校児童生徒の現状」について、不登校だけではなく長期欠席にあたるパターンも増えており、課題を感じているとのことだったが、どのような理由で長期欠席になっているのか、また、なぜそれを課題に感じているのかという点を伺う。
- 事務局 長期欠席については、病気や経済的理由など様々あるが、不登校と認識することは学校に任せている部分もある。1日休んだ日が継続して30日を超えたら不登校に移るが、その状況把握が十分にできていない。また、不登校の現状と長期欠席の数かなり乖離しており、内容把握の必要があるということで取組を進めている。
- 事務局 また直接的に「学校で学ぶことができていない」という結果で言えば、不登校という理由であっても、体調不良等の理由であっても同様である。つまり、居場所や学びの場が子どもたちにとって魅力的なものになっているのかを問うときに、長期欠席も1つの対象にすべきであることも併せて関係すると考えている。
- 山崎委員 長期欠席について、何となく腹痛や頭痛で学校へ行きたくないとなると、学校も不登校の方にカウントするのではないかと考える。しかし、例えば診断

がついて起立性調節障害や過敏性腸症候群などと言われると、途端に病気の扱いになってしまうケースもあると思われる。本当に病気と判断されるものが増えているのか、それとも今申し上げたような心身症と言われるケースが増えているのか、もしわかれば教えてほしい。

事務局 学校から教育委員会に、不登校か病気なのかという相談もあり、精神的なものや起立性調節障害については、不登校でカウントする場合もあるし病気とする場合もある。いずれにしても、子どもが行きづらい状況については変わらない。カウンセラーや医療連携をさせていただくことにしている。教育委員会もしっかりと学校と連携をしていく必要があると考えている。

山崎委員 文部科学省のデータ等を見ていくと、病気に該当する部分が急速に増えている。状態が違うものが病気と判断されているのではないかというところまで、少し丁寧に見てもらおうとよい。

事務局 コロナ禍で体調がよくなければ学校に来ないほうがよい、あるいは自宅で静養するといったことが推奨される時期があった。そのような経緯もあり、学校に行ける状態でも調子が悪くて休むケースがあったと把握している。学校に押し出す力も必要であるし、学校が子どもたちにとって魅力的なものになっているかを改めて考える必要がある。

事務局 その他なければ議事に入らせていただく。
ここからは七木田座長に進行をお願いする。

七木田座長 次第に沿って進める。皆様には事前に資料が配布されていると思う。大きい流れの着地点を先に申し上げる。資料6をご覧ください。そこで論点が2つ提示されている。論点①は「めざす学校像、めざす生徒像」について、それぞれの立場から意見をいただく。論点②は「学校の特色について」、先ほど説明があった学びの多様化学校についての是非を問うのではなく、具体的に動き出すということで皆様方から意見をいただく。
それでは、資料5「三次市が創る学びの多様化学校について」事務局から説明をお願いします。

事務局 ～資料5・資料6・資料7に沿って説明～

七木田座長 ただいまの説明について、意見をいただく前に何か質問や確認はあるか。

宍戸委員 めざす生徒像として「ありのままの自分」という言葉が出ているが、ありのままの自分をどのように捉えているのか。

- 事務局 まず自分らしさを大事にしながら、人と比べない、自分のよさや自分らしさ、自分が大事にしている価値観をしっかりと認識しながら、それが自分らしい自分という、そうした自分らしさをここでは「ありのまま」と表現している。
- 沖山委員 ほかの項目ともつながるが、「ありのままの自分がいいと思う」という部分まで含めると、どのような状態の子どもの姿となるか。
- 事務局 自分らしさを押し殺してでも誰かに合わせなければならないことより、自分の学びのスタイルや自分自身の学力等を大切にしながら学びをつくっていくことにつながるような表現で記載している。
- 沖山委員 資料5の2ページに「(2)一人ひとりに応じた個別最適な学びの創造」とあるが、中学校では教師の指導計画が思い浮かぶ。個々に応じたカリキュラムとあるが評価の中で個別最適なのか、新しく別につくることができる総合の時間を増やすのか、もしくは、生活の時間を増やす部分での個別最適なのか、あるいは全てかを教えてほしい。もし評価において個別最適なカリキュラムとする場合はどのようなになるか伺う。
- 事務局 カリキュラムや教育課程の具体についてはこれから検討する。学習指導要領が定める授業時間数を削減し、空いた時間をなるべく一人ひとりに合わせた学びの時間として設計していく。各教科の学びの中で、一人ひとりに合わせた個別最適な学びを設定していく点が「個別最適な学びの創造」という表現になっている。評価に関してはこれから考えていく。
- 七木田座長 他に何か質問はあるか。
- 委員一同 ～質疑なし～
- 七木田座長 2つの論点について、意見をいただきたいと思う。
- 山崎委員 めざす学校像や生徒像について、強い思いを持って練られてきたのだと思う。資料4の9ページのスライドにも学びの多様化学校の位置付けがある。これは学校という点を前提に、カリキュラムや学校生活のルール等も児童生徒の主体性や思いを大事にすることはとても大事なことだと思う。めざす学校像に書かれていることはとても大切だが、学校教育に携わっていて、これは普通の学校ではできないことなのかと疑問に思ってしまう。できればすべての学校の子どもにとってこうであってほしいという中で、学びの多様化学校に何を期待するのか、どのような役割を担うかを考えると、先ほど複数の方から話があった「自分らしく」とか「自分がいいと思える感覚」

をどの段階から子どもたちに育成すべきかがはっきりするのではないか。めざす生徒像についても「ありのままの自分がいいと思う」というのは、本当にどの児童生徒にとっても大事な感覚である。私自身スクールカウンセラーをしており、たくさん子どもと出会うが、その感覚はあるが不登校の子どももいるし、不登校に至っていないが、感覚が持っていない子どももたくさんいる。どのような力を身につけてほしいのか、そしてそれが通常の学校では難しいため、学びの多様化学校に期待するという流れがはっきりするとよいと思う。

民間のフリースクールやスクール S とともに多様に連携をしておられると思うが、それも含めて教育委員会が文部科学省に申請をして設置する学校ならではの役割とは何かをはっきりさせるべきである。

水戸委員

めざす学校像として、「自らが選び決めることで、自分らしく」という文言がある。月に1回、教育支援ルームに行っている。近年、小学校入学からあまり間がない子どもたちについて、自由な保育所から小学校に入り、真面目であればこそ、学校に求められる時間設定の中で生きていくことが苦しくなり、不登校になってしまう子どもがいる。教育支援ルームに行き、自ら選び決めて活動することで、別人のようにかわるケースがある。自由であるがゆえに自分らしさを出し切れることの価値を目の当たりにしてきた。ただ教育支援ルームはあくまで支援ルームであり、子どもたちも学校に行けていないという気持ちはある。学校というシステムの中で、従来の学校とは違う、自由に選び、成果も感じるができるものになれば、非常に意味が大きいと感じた。

多様な人々とのつながりも出てくるが、小規模の小学校にスクールカウンセラーとして行っていた経験がある。大規模な小学校と違って地域とのつながりがとても多く、大規模な小学校は横の関係しかないことが多い。横の関係では自分が出せず、友達関係が苦手で勉強もできないと元気がない子どもも、縦の関係があり、地域のお年寄りと関わられるような学校だと、自分らしさを認めてもらえていると感じる。統廃合が進むと小規模校のよさがなくなってしまったため、縦のつながりがあり、大規模校とは違う学校を選べることも魅力的なことだと思う。

赤木委員

本校でも30日以上欠席している児童がおり、多様な学びの場が増えることはとてもよいことだと思う。学校になかなか行きにくい子どもがフリースクールや教育支援ルームを活用したり、色々なところに相談してエネルギーを蓄え、また学校で学ぶ子どもが増えている。山崎委員の言われたように、ここに掲げている取組を小学校でも行っている。うまくいかないこともあるが、学びの多様化学校として、より突き抜けた特色があると保護者の理解が深まるのではないか。現在、三次市は通学区域自由化制度を取り入れており、入学時に学校を選ぶことができる。他の学校以上に学びの多様化学校に入学

したいと思える魅力をより明確にする必要がある。

地域とのつながりについて、三次市はコミュニティ・スクールに力を入れており、八次小学校と八次中学校で地域と一緒に取組を進めている。地域が「特別にできた学校」という捉えにならないよう、学びの多様化学校と地域のつながりについても議論の必要がある。

池田委員

不登校生徒の中には、教室に行けず SSR や保健室に行って勉強する子どもがいる。自分がそれでいいと思えるのは言葉で言うよりも難しい。自分なりに自信をつけ、これでよいと思わせることができる学校でないと難しい。自分なりに選択し、大胆に挑戦できることが魅力だと思う。

学校では、総合的な学習の時間は限られており、同時に基礎学力をつける必要がある。学びの多様化学校では、地域の人々との活動に時間を割き、そこから自信につながれるというコンセプトが明確になればよい。

今の塩町中学校や前の三次中学校で行われていた、地域の人との関わりは本当に大切に、そこが光る学校をつくりたい。

沖山委員

八次中学校で SSR の担当をしており、前任校でも SSR の担当であった。それ以前は、長い間特別支援の担当だった。説明を聞き、特別支援教育の要素が入っている取組だと感じた。めざす生徒像は「ありのままの自分がいいと思う生徒」だが、SSR に来ている生徒はありのままの自分が全く見えていない。見えていないがゆえに自信がない。自信がないため、教室に入るエネルギーも湧いてこない。もっと言えば、目の前にある進路実現に向けての自信もないという状況である。また、自分に対して自信のない子どもは、学習がみんなより劣っていると感じている。ここで少し自信がつくと、進路に向かって頑張ろうという流れに変わっていく。進路実現に向けて、各教科の先生に依頼し、空いた時間にマンツーマン授業をしていただいている。授業のように多くのことはできないが、「これだけは大事だからできるように」といったことを地道に積み重ねていく。ある時、試験にその問題が出て、高い点は取れないが、できた実感が湧く。ちゃんと教えてもらえば自分も理解でき、点が取れると感じ始めると本人が走り始める。すると本人から、「あの先生が来るのはいつか」、「別の教科の先生にも来てもらいたい」と言葉が出る。まずは小さな自信をつけることで、色々なことがうまく運び、SSR という小さな社会の中で人間関係ができる。もちろん学習だけでなく、調理実習などの共同作業で関わりを深めると、コミュニケーション能力が少しずつ高まる。そして自信を持って、「今の自分なら」とこれからの進路が考えられる。ここでやっと、進路に向かうみんなと同じ土俵に立てる。ここにある「ありのままの自分」というのは、余りにも言葉が大きいと思う。平たい言い方だが「自分に自信が持てる、そんな自分がいいと思う生徒」の方がよいと感じた。

石田委員

生徒と不登校の生徒が行きたいと思う学校というのは、どんなものか考えて

いた。自分はダメだと落ち込んでいた生徒が「今の自分でいい」ということで、やりたいことを見つけた時に学習意欲につながる。その学習意欲が先生をつかまえてでも教わることにつながり、その積み重ねが結果となり、なりたい自分になれると思う。自分を一人の人間として認めてもらい、みんなとつながらないと自分らしさが発揮できないのではないか。だから、「みんなとつながり自分らしく学ぶ学校」という、この文言はよいと思う。

渡邊委員 資料4の9ページにある不登校支援対策の図で、家から出ることができる軸の中に多様な居場所があり、家から出て学校に行くことができる軸の中にも居場所がある。全ての子どもたちを取り残さない図になっている。山崎委員が言われたように学校であること、中学校であることが大きなポイントだと思う。中学生で学校に行きづらい子や小学生で地元の中学校へ行きづらい子どもたちの声が重要だと思う。広島県としても大きくとらえた要因の分析として、多岐にわたり複合的だと理解した上でやる気が出ない、不安・抑うつが多さをどのようにとらえるかが非常に重要になると思う。特に小学校高学年から中学校にかけての要因の分析の中に、学校に行きたい、楽しい、みんなに会いたい、先生と勉強したいという学校にしていくためのキーワードがあると思う。

宍戸委員 苦しんでいる子どもや保護者と向き合う中で、ありのままの自分でいいと言ってきた。しかし、本人達には理解してもらえていない。理解できないのではなく、伝えている側もありのままの自分がどういうものか明確に把握できていないためである。

満身創痍の子どもたちに、「ありのまままでいいよ」という声掛けをし、本人が「うん」と頷く構図から、「ありのままの自分がいいと思う生徒」という文言ができていると思うが、私はこの言葉を入れない方がよいと思う。この文言を入れることで哲学が崩れる場合があることを知っておいてほしい。「自分を大切だと思える生徒」や「自分に自信が持てる生徒」という文言がよいのではないか。子どものほとんどは、笑いたい、みんなと一緒に遊びたい、学校に行きたい、親に迷惑をかけたくないと思っている。事情によって、思いを発信できない子どもたちとどう向き合うのかということに対して、学びの多様化学校をつくることには大賛成である。「ありのままの自分がいいと思う生徒」以外の言葉はこのままでよいと思う。

部谷委員 「自分っていいな」「周りの仲間や大人のことが大好きだな」と思えた時にその学校が人生の中で価値のあるものになり、学校生活や人間関係を力にして歩いていくのだろうと思った。

保育所の小さい子どもは、やりたいと思わないとその気にはならない。資料には、「学校に行きたい、楽しい、もっと学びたい」が重点目標に挙げられている。三次市の学校教育は、そこを丁寧に一緒に探り、つくっていくという

教育内容なのだろうと思った。自分1人ではできないことも支えてくれる人がいたからできたという経験を積み重ねることで、個性を尊重し、後ろだてがある環境があることで、他の誰でもない自分を感じていけるような場になる。

資料4の8ページで、やる気が出ないという部分が一番大きい。そこにしっかり意味を感じて取り組むべきである。子どもたちの「やりたい」をつくることは保育現場でも大変である。年齢が高くなり社会性が発達すると、「自分はあまり好きではないが、みんながやっているからやってみよう」といった、人との関係性の中でやりたいことを見つけていく。興味の中に見出していけるような教育環境ができれば子どもの幸せにつながると思う。

田中副座長 学校像の部分だが、教育支援ルームに来ている子どもは、みんなとつながり自分らしく学ぶことが苦手である。自分らしく学ぶことも苦手である。教育支援ルームに来て、まず自分がどういう姿でいたらいいのか迷っている。だが、そこには学年を越えた多くの子どもがおり、その中で周りをよく見ている。他の子がどう行動しているのか、その中で自分はどうあればいいかを理屈ではなく試行錯誤している。そのため、ありのままの自分というのは難しい。子どもは自身をありのままだと思っていないかもしれない。私は試行錯誤の途中だと思っている。みんなとつながる中で、自分らしさや自分らしい学びはどうあるかを試行錯誤するという理念はよいと思う。ありのままを言葉だけで考えると色々な想像が浮かぶが、なりたい自分や嫌な自分もあるが、今の自分を受け入れてくれる安心感につながると思った。

七木田座長 「みんなとつながり、自分らしく学ぶ学校」というのは、三次市の学校全てがそうあるべきである。文部科学省に提出する書類としては、学びの多様化学校という部分を打ち出すことがよいのではないか。自己決定の話になると自己責任が思い浮かぶ。個人的に耳障りがよい言葉はしっかり疑った方がよいと思う。自分らしくと言われるが、自分らしく不登校を選んでいるため、もっと自分らしくと言われても困ると思う。この文言を前面に出すことによって、教育の哲学みたいな部分が崩れるのではないかと感じた。より明確に方向性を示す文言を選ぶ方がよいと思う。アンケートの中で、小学生の17%程度が「勉強がわからない」と答えていた。中学生のアンケートはないためわからないが、中学生についても分析されていると思う。あまり耳障りがよいと疑ってしまうため、その言葉になった経路は明確にした方がよいと思う。

七木田座長 めざす学校像とめざす生徒像について、委員の皆様から意見をいただいた。限られた時間のため、他に意見がある方は資料内のアドレスに送り、共有してほしい。設置にあたり同時進行で具体的に動いていると思うが、学校像や生徒像等、重要な部分に対して委員の皆様から意見を聞いたところである。

他に意見がある方は、アドレスに送付していただきたい。

七木田座長 引き続き資料の論点②-1 から論点②-4 について意見を伺う。

山崎委員 「ありのまま」とは、「学校とは何か」に帰結すると思う。「ありのまま、自分らしく」とは、成長や変化しなくてよいということではない。学校は人が育ち合うところだと思う。学校教育である以上成長を期待し、それに基づく評価ができ、かつ中学校は卒業後の進路実現に向けて考えていく必要がある。中学校は義務教育の最後の砦である。東広島市で不登校支援をしているが、中学校3年生の最後で関係を深めておかないと、その後、本人や家庭にアクセスできなくなる。つながりを持つという意味でも大きな責任がある段階である。不登校の子どもたちは、社会とのつながりを諦めかけている。もしくは諦めていると感じる。そのため、まず自分を理解してもらうことが大切である。論点②-1 について、設備面や環境面で木の机や柔らかいソファ等の教育環境は大切だが、教職員には児童生徒理解の資質を高めてもらいたい。それがないままでは効果的な支援はできない。子どもの抱える生きづらさや困り感についてアセスメントの力を備えた先生と、過ごしやすい環境があるとよい。学びのスタイルは「学びのユニバーサルデザイン」という、授業計画の段階から多様な子どもがいることを前提に授業を構成する考え方の枠組みのようなものがある。北海道教育大学の川俣先生が作られたホームページや資料があるので、後程共有する。

次に論点②-2 から論点②-4 について、現在尾道市が不登校児童生徒のための特別な教育課程の編成を研究課題とし研究開発している。私もそこに携わっている。どこまで手を出し、手を引き、子どもたちに学ばせ、評価するか、尾道市の先生方が苦勞して取り組まれている。ゆとりのある時程の設定や通学、給食、評価方法についても理解なしには難しい。遅く来てよいということが必ずしもすべての子どもに当てはまるわけではない。多様な子どもがいるという前提に合わせる必要がある。例えば、授業は少し遅めの時間から始まるが、空いた時間に個別面談や体験学習を設定すれば、個別面談の時間には行けないが授業から行こう、朝早く行って先生に話を聞いてもらおうという選択ができる。子どもたちが体験を通して学び、当事者性を見つけることが主体性につながっていくと思う。体験不足の子どもであれば、そうした活動が大事で、自分と外の関わりを信頼できる大人に守ってもらっていると感じることが心理的な成長につながると思う。そうした体験が学校の中でできるとよい。当事者性や主体性が育ってくれば、オンラインや AI による学び直しも、自分で学んできたと思える気持ちや学ぶ意欲が子どもたちの中から出てくるのではないか。対面では怖いけど、オンラインであればつながってみようかなと思える信頼感やつながりが持てると思う。段階的な成長を意識し、オンラインの場でドリルやデジタル教材が活用できるのではないか。

水戸委員 自己受容は人との関わりの中でしか得られないため、学校の関わりの中で身につけてほしい。やる気がないことが原因で不登校が増えている。不登校の子どもと話をすると、通信制の高校があるという情報が広がったことも原因の一つだと感じる。中学校に行かなくても高校に入ると知り、学校に行かなくなる。しかし、義務教育の時に学校に行かないと通信制の高校でも続かない可能性が高くなる。自己受容を得るためには、自分一人でどれだけ充実した生活をしていても難しい。本人が安全を感じ、行きやすい学校に行けることが大きい。一方で、話を聞くと純粹に勉強につまずいた子どもも中学生の中で増えている。つまずいたところまで戻り、習熟度に応じて勉強を教わることができれば通えるようになるのではないか。論点②-1について、教職員との信頼関係の確立も大きい。中学校や高校に通うことができず、人生がうまくいかないと感じている人が成人した時に、あの先生だけは信頼できたという人間関係を持っていることで何とか生きている人もいる。信頼できる教職員と関わりが持てる中学校は大切である。論点②-3について、三次市の広さを逆手に取り、施設を巡回教室にする発想はとても素敵だと思う。

赤木委員 論点②-1について、一人ひとりの生徒の個別担任制の導入だが、信頼関係をつくることのできるため、個別の関係はよいと思うが、標準法の中での教職員数で対応できるか疑問である。論点②-2の通学方法について、小学校の保護者に教育支援ルームのことを伝えても、仕事があるため送迎できないと答える人もいる。通学方法について議論が必要である。親の都合で通わせられないという言葉が出てはいけない。

池田委員 論点②-2の「学ぶ意欲につなぐための評価方法」について、大学のように1つ光るものがあれば推薦で入る方法がある。自由に決められるなら、他が苦手でも自分には一つこれがあるというものを評価できる方法があればよい。協働性や社会性を育むことは大切なことである。認知能力もだが、非認知能力は人間性がベースになっている。それを育むことで認知能力も向上するため、文言はこれでよいと思うが、好きなことをやって力がつくわけではないので、社会性や協働性、非認知能力を今後はこのような形で育み、人生成功の糧になるといえるものを持たせるようにすることが、この学校の一番の価値だと思う。

沖山委員 論点②-1の「学校の特色」だが、設備備品の例でソファの設置やリラックスできる空間づくりと書かれている。私の経験から、ソファがあるがゆえに雰囲気崩れることがある。特別に先生と話をする個室にソファと机と椅子の配置がよいと思う。通常の学級にソファを置くと、そこをめぐってトラブルが起こる。またリラックスできるからと置くことで、本当にリラックスする。そのリラックスが広がることはよくないと考える。教職員の備えておくべき資質だが、SSRのような不登校の子が集まる空間は、多様な事情

や特徴を持った子どもがいる。教職員も最初は生徒理解で傾聴し、話をよく聞くが、丁寧にするがゆえに教職員が子どもに振り回される状況に陥りやすい。その状況が続くと教職員が疲弊し、心が折れてしまう。新しい学校に関しては、今まで経験したことのない空間になるため、教職員が心のたくましさを持たなければならない。生徒理解のための研修も大切だが、教職員自身のための研修も行ってほしい。

石田委員 論点②-1 で感じたこととして、先生はコミュニケーション能力のある先生が必要ではないか。生徒の悩みを否定したり比較したりせず、聞く力を持った人が必要だと思う。加えて、伝える力を持った人も必要だと思う。部屋について、ソファを畳の部屋に置くなど、静かに考える環境があるとよいのではないか。

渡邊委員 学校であることが大前提で、全てが学習に帰着していると思う。環境や教科や学び直し、探究も全て学習に帰着していることを考えると答えが見えてくるのではないか。論点②-3 は三次市の最大の魅力ではないか。それと同時に広さをどう捉え、通学問題や資源をプラスに変えるにはどうしたらよいかを考える必要がある。以前、小学生にとったアンケートの中で、遠足は好きだが地域の人に会うのは最下位だったことがあった。地域の方を講師に考えることは大切だが、このギャップをどのように埋めて学びにつなげるか検討が必要ではないか。

宍戸委員 論点②-1 の教職員が備えておくべき資質が重要である。設備や備品をそろえても、続く子どもは続くし、やめてしまう子どもはやめてしまう。オンラインもそうである。オンラインでもよいと思って数回やったが続かないことがある。結局はマンパワーではないか。重要なのは保護者の対応が上手であることだと思う。いくら子どもと先生の関係がよくても、保護者が先生に対して不信感を持つと崩れてしまう。自分の子どもはこうであってほしい、こうでないといふ思いから、ありのままの私でいいでしょうとつながる。そこを教職員がどのようにコントロールするかで不登校児童生徒が変わる。もちろん、行った先で様々な年代の子どものさりげない言葉を聞くことで成長していく。教職員が備えておくべき資質で学びの多様化学校の核が決まるのではないか。

部谷委員 論点②-1 について、まず子どもの状態と背景をどうとらえていくかが重要である。校長先生を中心として、教育学や心理学、福祉、保健、様々な専門職がチームになり、アセスメントしていける体制が必要だと思う。次に家庭の教育環境である。不登校児童生徒の支援拠点である器であり、家庭支援もできるチームが必要である。最後に先生も子どもと元気で楽しく過ごすことである。子どもの興味や気持ちを広く理解ができることが必要だと感じた。

田中副座長 論点②-1に関わって意見を述べる。学びの多様化学校には多く選択肢を用意し、それを子どもが自分で選び、決められることが必要である。そのための個別担任制は賛成である。個別担任制は選び方や選ぶ方法、その結果のフィードバックによって小さな成功体験につながる。徐々に1人で選べるようになっていくと考える。ただ、担任になることですべてを背負い込むかもしれないという懸念がある。保護者の対応もあるし、教科の授業もある。これでは担任の先生が回らなくなるのではないか。人事の規模は想像がつかないが、やはり学校として、チームとして、担任の役割の線引きは必要である。スクールカウンセラーやソーシャルスクールワーカーの配置があるなら、相談室の中にいるのではなく、チームとして情報共有や学校行事が不安な子どもの後押しをしていただきたい。それぞれの役割を明確にし、全教職員でチームとして取り組むことが大事ではないか。

七木田座長 論点②-1について、教職員の資質にはたくましい心が必要という意見があったが、枠組みができればそこで活躍する人材はぜひ育てていただきたい。また、特別支援教育との絡みはとても大きいと思う。三次市の巡回相談として小中学校を回り、配慮が必要な子どもへ資料を持って行っても学校に来ていないことが多かった。特別支援の範囲の情報もあわせて持つ必要があるのではないか。現在、ギフテッドという非常に能力が高い子どももおり、成績がよすぎるためにクラスの中で社会性が築けないことが問題になっている。不登校の予備軍として考えられる。その点も教職員の理解や資質と合わせて考える必要がある。

七木田座長 その他なければ、今後のスケジュールについて事務局から説明をお願いする。

事務局 ～資料に沿って説明～

七木田座長 質問や意見等あるか。

委員一同 ～質疑なし～

七木田座長 以上、予定した議事はすべて終了した。議事の円滑な進行にご協力いただき感謝申し上げます。本日の会議で出し切れなかった意見は事務局にメールし、共有していただきたい。
進行を事務局にお返しする。

事務局 熱心な議論に感謝申し上げます。
以上をもって、第1回三次市立学びの多様化学校等の設置に係る検討会議を終了する。